

赤谷の森だより



赤谷プロジェクト地域協議会
財団法人自然保護協会
赤谷森林環境保全ふれあいセンター

第 9 号



コラム*赤谷の森から

暮らしが物語る

森と人間

(財) 日本自然保護協会

茅野恒秀



私の得意分野は、「人の話を聞きとる」ことです。赤谷の森を訪れた際には、地元の皆さんのお話をうかがうことをいつも楽しみにしています。特に国道17号線が開通する前後までの生活を経験してきた方々のお話には、興味深い自然と人の暮らしとのかわりが垣間見えます。

春から秋は畑仕事や養蚕、秋には牛馬の冬支度のために山で草を取り、晩秋から冬にかけて山で炭焼きや鉾をして過ごす——お話をうかがう中で、昭和30年代前半くらいまでの赤谷の森周辺の地区の典型的な暮らしがわかってきました。その後、薪炭利用が減り、牛馬がトラクターなどに代わることで、自然と人の暮らしとのかわりが変化していったということです。

人が森に積極的に関わる中で、自然界では、人が薪炭のために林を伐ったり、草を採る、放牧をす、という長く営まれた里山での

生活に適應して、草原を住みかにする生物もいました。代表的なのは蝶類の一部ですが、今、その多くは全国各地で絶滅の危機に瀕しています。生物の暮らしも、人の暮らしと深く関わっていることがわかります。

また秋の草採りでは、各地区で決まりがつけられ、誰かが共有地の草を取りすぎて皆が困らないように工夫がなされていたようです。山菜採りについては、子どもの頃に周囲の大人から「フキは引き抜かない」「コゴミの芯は残す」などのルールを教わったという方もいました。このような、必要な分だけを森からいただくという習慣は、自然からの恵みを将来に持続させる知恵のひとつでしょう。

赤谷プロジェクトがかかげる「生物多様性の復元」や「持続的な地域づくり」のヒントは、遠い奥山にあるのではなく、私たちの暮らしの身近なところに隠れているのかもしれない。

赤谷プロジェクト紹介

AKAYAプロジェクトと

環境教育

今年の11月28日(金)・29日(土)・30日(日)の3日間、みなかみ町新治地区の旧・猿ヶ京小学校を会場に、「環境教育・関東ミーティング2008 AKAYA」を開催することになった。テーマは、「多様な自然の気づき方、伝え方、エコツーリズムへのつなげ方」生物多様性の保全と環境教育を考える」で、関東圏の環境教育に関心を持つ人たちが、約500人くらいが参加する。主催は関係者14人で作る実行委員会、共催は、(財)日本自然保護協会、林野庁関東森林管理局、(社)日本環境教育フォーラムです。企画にご協力頂き、大事な猿ヶ京小学校を貸して頂いた地域の行政機関やご後援を頂いた皆様に感謝したい。また、この機会にちよつとのぞいてみたいと思われる地元の方々は歓迎で、ぜひ声を掛けて頂きたい。敷居が高く感じられるかもしれないが、ありそうでなかった研究と交流の場とキャッチコピーをつけたほどなので、参加している人たちも顔見知りは少ない。詳細は次のサイトでご覧頂け、日帰り参加もできる。

<http://www.nacsj.or.jp/akaya/ekm.html>

このミーティングは、発表や交流の機会として2004年から開催し、5回目になる(昨年までは、赤城で開催)。この間、生物多様性や、エコツーリズム、地産地消、地域づくりという、自然と人との関係を見直す取り組みがテーマとなり、私たちにも、

研究や保護管理のコーディネートや、コミュニケーションの仲立ちが期待されるようになった。この要望にどう応えたらよいか、経験を持ち寄ろうと思う。ここでは、2004年から「AKAYAプロジェクト」を展開してきた。これは、赤谷の森1万ヘクタールの国有林で、地域・行政・公益法人が協力し「自然と社会の持続性の修復・保全」のモデルを作る活動。そこでは、環境教育を目的と手段の両方に位置づけている。このミーティングでは、その場所を見ながら、「多様性と持続性の確保の仕方」という世界のどこもが困っている課題を、教育面から相談したいと思っている。

■「環境教育」とは、どういつものか?

少し長くなるが、この教育活動のこれまでをたどってみたい。

①欧米に始まる、自然保護教育・自然学習

欧米では、自然に関する教育は昔から行われていたが、自然保護に関わる教育は19世紀の後半(日本では明治時代)から行われ始めた。それは、資源を維持する目的であったり(禁猟区・鳥獣保護区や狩猟や、景色・景観の保全に関する教育など)、生きる喜びを増す目的で自然との共感的な態度を育てるもの(国立保護区や国立公園といった場所や、農地の保全に関する教育など)であったりした。環境教育は、この比較的新しい教育活動にルーツがある。

スコットランドの首都エジンバラでは、環境の質と教育の質を結びつけた最初の人で、「環境教育の開拓者」といわれるパトリック・ゲデイス(1854-1932)が、アウトロック・タワー(Outlook Tower)という展望塔を使って独自の自然学習を作り上げた教育活動が知られている。また、末尾で紹介する、アメリカのリバティ・H・ベイリ

(1858-1954)も、自然科学教育とは目的が全く異なる、自然学習と呼ぶ教育活動を行っている。この自然学習という言葉も、今の環境教育とはほぼ同様の意味で使われている。

②自然保護教育と環境教育

1948年になると、国際自然保護連合(IUCN)。1948年当時はIUPNといった。日本自然保護協会はIUCN日本委員会事務局)が、自然保護教育委員会を作る。1963年、この委員会はケニアのナイロビで環境教育ワークショップを行い、環境教育という言葉が使われる。1970年には合衆国環境教育法が作られ、1972年には、スウェーデンのストックホルムで世界初の国連人間環境会議が開かれ、環境教育の勧告がなされた(キャッチコピーは、オンリー・ワン・アース、「たった一つの地球」)。そして1975年、国際環境教育会議でベオグラード憲章という環境教育の憲法が採択される。環境教育の目標は、関心、知識、態度、技能、評価能力、参加の6項目とされ、何を育てていかなくはならないかが明確になった(これらは今も変わらない目標)。

日本でも、1960年代に生じた深刻な公害や自然破壊に対する社会運動が発展し、解決法としての環境教育。日本自然保護協会は、ストックホルム会議を受けて自然保護セミナーを始め、ベオグラード憲章を受け1979年に始めたのが、自然観察指導員養成。今年でちょうど30年になる。

1980年には、世界自然保護戦略(キャッチコピーは、「自然は、子孫からの借り物」)の発表、1987年には環境と開発に関する世界委員会が開かれ、テレビなどによる知識と情報の普及啓発が何より重要とされた。1990年にはアメリカで環境教育の推進等のための法律が新たに制定され、しば

らくたつた2002年、南アフリカ共和国ヨハネスブルクでサミットが開かれる。そこでは、日本のNGOと政府の共同提案で、2005年からの10年間で、国連持続可能な開発のための教育の10年(ESDの10年)とすることが決められた。AKAYAプロジェクトも「ESDの10年」に参加し、どうすれば持続性が保てるかを見つける役目を担っている。

③最近の日本でも

1990年、ヨハネスブルクサミットの年に日本環境教育学会が創設され、環境教育の理論的体系付けが目標とされた。ブラジルサミット翌年の1993年に環境基本法ができ、2003年には環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律が制定。第2条第3項で「環境教育」とは、環境の保全についての理解を深めるために行われる環境の保全に関する教育及び学習をいう」と定義され、環境教育の施策がようやく行われるようになった。林野庁も、森林環境教育と名づけた教育活動を2002年の森林・林業白書でうたっている。

①「森林の中での様々な体験活動等を通じて人々の生活や環境と森林との関係について学び、森林の持つ多面的機能や森林整備と木材利用の必要性等に対する理解と関心を深める」教育を全国に普及する、
②人材の育成、③森林・林業に対する理解を深めるための活動プログラム・教材の作成を進める「森林環境教育推進総合対策事業」を2007年から実施し、「森で学ぼう! 森林環境教育ネットワーク」サイトも作られた。

<http://www.shimireku.jp/feenet/index.html>

自然の恵を生み出す「生物多様性」を守ることや、その恵を活用した持続可能な社会を作ること目標に盛り込み、森林整備や木材利用を目的でなく手段に位置づけていけば、いい教育活動になると思われる

る。

このようなことを考え、実践し、決して子供だけでなく大人も共に学びあうというのが、環境教育。何から進めていくかは、地域の自然と人に合わせる必要があるためオーダーメイドになる。この地域で大事にすること(ポリシーという)は、少しずつまとめていきたいと思ひ、AKAYAプロジェクトでは環境教育ワーキンググループを作って進めている。地域の方にはだいたい知られてきたかなと思う、相模地区・いきもの村(苗圃跡地)の毎月第一土日の集まりも、この教育活動の一環となっている。

■環境教育のために、訪ねたいところ

AKAYAプロジェクトをすすめる旧新治村には、環境教育に活用したい施設が多い。

☆「三国街道・永井宿郷土館」(永井、入館料300円)

は、接客される笛木さんの素朴な対応と、実物展示のリアルさが売りの資料館。その実物に、それが何で、私たちにどうという意味がある「ものごと」かの解説がより充実したら、いいビジターセンターになる。自然に関しても、土地の蝶好きの方が作られた実物入りの「しおり」が展示されているが、この地域にはいないベニヒカゲがいくつも使われている(長野県では天然記念物。八ヶ岳では、あと少しの時間で絶滅しそうな種)。こんな形で使えたのであれば、普通にいた生きものだったはず。どこで発生していたのか、平標山か。消えたとしたらいつ消えたのか。また、十国犬(じゅっこくけん)という、法師温泉で大事にされていた在来のおくぐり犬(すでに品種としては消失)の剥製が飾られているが、東京・上野の国立科学博物館にたった一頭収蔵されている、ニホンオオカミ(明治42年の記録を最後に絶滅)

の全身剥製によく似ていて、ニホンオオカミから作り出されたのではないかと思われる。森の中を極めてすばやく走れた(解説版より)とのことも、合点がいく。過去を知り、今に活かすために、一つ一つのものが活かされている状態を作りたい。

☆「猿ヶ京閩所資料館」(猿ヶ京、入館料500円)は、江戸時代のバスポート館というサブネーム。閩所の機能やできごとは勉強になるが、私には、旅の装束をみて、江戸時代の人たちのアウトドア・ワークへの備えと、ギア(野外活動用の小物や携帯用の道具類)が参考になった。調査用の道具・身なりとして一つ欲しい…と思えるものも展示され、制作意欲を掻き立てられる。

■環境教育の参考になる図書

○「自然観察ハンドブック」(財)日本自然保護協会、1996 平凡社：第一章「今なぜ自然観察か」は、日本の環境教育の理論的支柱であった、亡き青柳昌弘先生の記念すべき原稿の一つ。

○「世界教育選集67：自然学習の思想」リバティ・H・ベイリ、1970 明治図書：古典の名著。

○「閩所の爺さま」持谷靖子著、2008 あさを社：昔話やお年寄りからのお話の聞き書き集。

○「いたちの雪かき」持谷靖子著、1990 国土社：やはり持谷さんがまとめた、旧新治村の伝説集。AKAYAプロジェクトでは、自然と社会に関するいい環境教育の活動を作り上げていきたい。皆様の参加と、ご指導ご協力を賜りたい。



横山隆一
(財)日本自然保護協会
常勤理事

高原千葉村を訪れる 中学生への環境教育

みなかみ町相俣の「赤谷の森」隣接地に宿泊施設「高原千葉村」があります。ここへ3泊4日の日程で、千葉市立中学校の2年生が訪れ、さまざまなメニューの体験学習をしています。

赤谷センターが、体験メニューの一つとして環境教育プログラム「いきもの村自然体験」を提供しています。同時に利根沼田森林管理署(沼田市)は、体験林業として間伐体験(森林の保育作業で植えた木の間引き)を実施しています。

また、これらの体験を希望する中学校に対して、千葉森林管理事務所(千葉市稲毛区)では、事前学習として環境教育を提供しています。



森林のはたらきについて、学んでいます

千葉森林管理事務所と赤谷センターおよび利根沼田森林管理署では、事前学習と現地での学習により、学習効果が増すよう連携しています。今年度の千葉森林管理事務所の事前学習は、5月21日(水)、千葉市の白井中学校で38名を対象に実施しました。まずはじめに、体育館で森林のはたらき、地域の気候による森林のちがいが、森林の保育について、スクリーン映像を見ながら学習しました。

そのあと、直径10センチ程度のヒノキの丸太をノコギリで切る体験を実施しました。木工クラブは、桜の木でモックン人形とえんぴつのキーホルダーを作りました。

左がモックン人形
右がえんぴつのキーホルダー



丸太切り体験をしています

現地での体験学習は、6月6日(金)に赤谷プロジェクトの活動拠点である「いきもの村」で実施しました。

3班に班分けし、①赤谷プロジェクト概要説明、②野生動物の調査実習、③いきもの村周辺の自然観察、の内容を入れ替わりで実施しました。赤谷プロジェクト概要説明は、赤谷センター田中直哉所長がスクリーン映像を交えてわかりやすく、赤谷プロジェクトの活動に興味を持ち、将来、サポーター等で赤谷プロジェクトに参加してもらうことを期待しつつ説明しました。



赤谷センター所長が赤谷プロジェクトの概要を説明しています

野生動物の調査実習は、赤谷プロジェクトで実施している野生動物調査の一つである、センサーカメラを使った調査について体験しました。センサーカメラとは、動物の体温(赤外線)を感知してシャッターを切るカメラです。赤谷センター職員が、実際に「赤谷の森」で撮影された野生動物や「いきもの村」の小屋に棲んでいるムササビの写真をスクリーン映像で見せながら、野生動物の



どんな動物が写るか楽しみです

このあと、赤谷センター職員がセンサーカメラの使い方を教え、いきもの村周辺の森林で、センサーカメラの設置実習をしました。班のみなさんが相談して、動物が写りそうな場所に設置しました。



センサーカメラ写真で動物の理解を深めます

生態・習性、また、森林に残された食痕、糞などのフィールドサインについて説明しました。

また、生徒たちを引率する先生や関係者を対象とした講習会が、高原千葉村の主催で例年3月に実施されています。赤谷センターと利根沼田森林



森の中で興味深く観察しました

設置されたフィルムは1ヶ月後に現像し、写っている動物のコメントを付けて、学校へ郵送し、参加した生徒たちが野生動物への関心を高めるよう努めています。
「いきもの村」周辺の自然観察は、自然観察路を利用して、赤谷センター職員、地域協議会員の自然ガイド長浜陽介さんが案内しています。今回の白井中学校には、長浜さんが案内しました。このプログラムでは、植物の生態を、葉を見てさわり、においを嗅いだりすることにより、五感を使って学習しています。また、動物の食痕、巣穴や、昆虫の痕跡などのフィールドサインを見つけ観察し、説明しました。生徒たちは、初めて目にするものばかりで興味深く耳を傾けていました。

今後とも関係者と連携しながら、環境教育プログラムの内容充実を図り、生徒たちの印象に残る体験ができるように努めてまいります。



先生の集合写真です



引率する先生がセンサーカメラの実習をしています

管理署では、提供している環境教育プログラムの体験・説明を実施し、引率する先生方の理解が増すよう努めています。



最近の活動紹介 & 活動のご案内

これまで実施した取組

●第3回ムタコの日

「第3回ムタコの日」を8月3日(日)にみなかみ町永井地区内の「赤谷の森」ムタコ沢で実施しました。参加者は38名でした。

「ムタコの日」は、「暮らしに欠かせない大切な地域資源の水を子供たちに受け渡し、おいしい水と豊かな森に支えられた地域づくり」を目標に、昨年度から地域協議会が中心となり、取り組んでいます。



深さの違う所から採取した森林土壌の透水性比較実験をしています(講師の長島さん)

今回の内容は、自然観察会と森林再生講座(山仕事体験)を実施しました。自然観察会では、元



森林土壌の断面を観察し、硬さを計測しています



ムタコ沢で記念撮影をしました

林と森林土壌、水源かん養機能についての講義の後、森林土壌の断面の観察、森林土壌の透水力の実験を実施しました。

また、国士館大学講師の中井達郎さんから、ムタコ沢で溪流の地質を観察しながら、森林と水循

関東森林管理局の職員で、(社)日本森林技術協会の主任調査員の長島成和さんから、カラマツの森林のなかで、森

環、地質と地下水についての講義がありました。その後、森林再生講座(山仕事体験)として、カラマツの保育作業体験を赤谷センターの職員、地元(有)三國林産造林の職員が指導して行いました。参加者のみなさんには、刃物を持つたことがない方も多く、思ったようにカラマツを伐ることができないこともありましたが、木が倒れるたびに歓声が沸き起り、楽しく作業をしていただきました。

次回のムタコの日は、秋に実施を予定しています。みなさんも是非、参加しませんか？



やっと木が倒れました

●放送大学で「赤谷プロジェクト」の授業が始まりました

テレビやラジオで講義を視聴し学習する通信制の放送大学(群馬学習センター、前橋市、矢野由美彦所長)の面接授業「生物多様性保全と国有林管理」が、5月17日(土)、18日(日)に実施されました。

担任教授は放送大学の河合明宣教授で、赤谷プロジェクト地域協議会の理事も勤めています。

1日目は、沼田市立図書館視聴覚室で河合教授が「授業の概要と利根川源流の特色」について話

し、赤谷センターの田中所長が、「赤谷プロジェクトの内容とその意義」で、赤谷プロジェクトの概要、協働の枠組み、植生管理や大型猛禽類などの各ワーキンググループの具体的な取り組み内容と連携、サポーター活動等について、また、日本自然保護協会の茅野恒秀さんが、「生物多様性と新しい時代における地域環境管理」で、赤谷プロジェクトの歴史的背景、枠組みやモデル性について、様々な視点から講義がありました。



河合教授の授業風景

2日目の野外授業では、みなかみ町相俣の「赤谷の森」の豊かな自然を観察しながら、森林土壌と植生の関係や生物多様性について解説しました。

授業は県外の学生も参加するなど大変好評で、来年度以降も継続していく予定です。

今後のイベント紹介

●環境教育・関東ミーティング2008 AK AYA

関東周辺で環境教育活動に取り組む方々や環境教育に関心をもつ方々の情報共有・研修・交流する機会として、「環境教育・関東ミーティング」が、これまで赤城青少年交流の家主催で4回実施されてきました。

今年度の第5回からは、みなかみ町の旧猿ヶ京小学校を会場に次の要領で実施されます。興味のある方のご参加をお待ちしています。

(テーマ)

多様な自然の気づき方、伝え方、エコツアー
ズムへのつなげ方

「生物多様性の保全活動と環境教育活動を考える」

(日時)

平成20年11月28日(金)～30日(日)

2泊3日(雨天決行)

(集合・解散場所およびメイン会場)

群馬県利根郡みなかみ町相俣

旧猿ヶ京小学校

(定員)

150名

(ホームページ)

<http://www.nacsj.or.jp/akaya/eekm.html>

(問い合わせ先)

専用メールアドレス eekm2008@nacsj.or.jp

または、(財)日本自然保護協会・教育普及部

(03-3553-4105 木幡・芝小路)

●NHKの子供向け教育番組「モリゾー・キッコロ 森へいこうよ!」の撮影が「赤谷の森」で進められ順次放送されています。番組では、プロの自然案内人(佐々木洋さん)と地元新治小学校の子供たちが「赤谷の森」の自然や動物の四季を楽しく紹介しています。今後の放送スケジュールは、次のとおりです。是非、放送をご覧になってください。

放送スケジュール(予定)

NHK教育/土曜午前9:50~10:05

11月15日(土)
「クモの不思議大調査! スパイダー探偵団」

12月13日(土)
「森の探偵団スペシャル!
生きものど〜こだ かくれんぼ写真」(予定)

12月20日(土)
「森の探偵団スペシャル!
森の両生類を調査せよ!」(予定)



いきもの村での撮影風景

編集部

だより

昨年度は、赤谷プロジェクトをテーマにしたテレビ番組が初めて放送され、今年度は、新たに放送大学の授業や、環境社会学会において、官民協働の先駆的事例として、赤谷の森をフィールドに、赤谷プロジェクトが取り上げられました。

このように赤谷プロジェクトの取り組みがさまざまな方面で関心を集めています。今後もみなさまのご支援をよろしく願います。

(赤谷の森のツツペ)